

全国審査員からひとこと



表現・発想の独自性

「教室の学習」は多人数を対象に描き方を教えることが多いので子供たちの作品は似た結果になりがちです。審査はそのような作品群の中から個々の表現の独自性が顕著に窺えるものを見出すことが楽しみでもあります。

今回は単に再現描写ではない様々な発想のものが高学年で目立ったような気がします。それらは彼らを取り巻く環境のせいかもしれません。そして発想にも独自性が求められるのは言うまでもありません。



玉川 信一（全国教育美術展担当理事、筑波大学名誉教授）

1枚1枚の作品が語るもの

初めての全国審査会参加で、日本の各地から集まったいろいろな題材、そして子どもたちの個性あふれる作品に出会うことができ、大変楽しく充実した時間を過ごすことができました。それだけではなく「この活動や題材を通して子どもにどんな力が育つか」ということを自身に問う場ともなりました。自分らしさを大切に、表現することで自己を実現していく図工・美術科の時間は一層大切になっていくと考えます。その子の思い、その子らしい表現に寄り添い、支えていく指導や授業のあり方を考える貴重な機会をいただきました。



東 尚典（北海道札幌市立旭小学校 校長）

表現のリフレーミング

石器時代から今日まで、こどもの発達の過程は世界共通です。雲や植物から形を見立て、地面に落書きして絵のイメージを追い、様々な素材に触れて遊んだことでしょう。

現代社会は、膨大な量の情報を扱っていますが、脳は何千年が過ぎようと、ほとんど進化していません。

知識や視覚情報が発達の許容量を超えるとストレスになります。情動脳は、感情と空間認識を司ります。エネルギーを呼び覚ます素材との出会いが、探究心をめざめさせ知恵をうみだします。情動が、自己表現を引き出し、心意気を回復させます。



石丸 良成（東京造形大学 非常勤講師）

絵の中に入り込む

全国から集まる作品は、個性的で一人一人のよさが絵に凝縮されていました。これは、制作過程で子どもと教師が共感し、子どもの思いを生かすための支援ができています。印象に残った事象、そこから整理分解され、線が生まれます。色を重ねる過程でにじみや重なりから新しい発見に気づきます。「不器用だけど少しだけ挑戦したい」「なんかいい感じ」という声も聞こえてきます。私自身も作品を見ながら絵の中に幾度もダイブしていました。



大城 直也（沖縄県南城市立玉城小学校 校長）

魅力的な作品を導く指導者の立ち位置

作品制作に際して、子どもたちが自らに様々な課題を課し、試行錯誤しながら問題解決していく体験こそが図工・美術の学びの核であり、適った作品は魅力を放っていました。教員の役割は、提供する題材がどういった学びにつながるかを多面的に想定し、基本的な技術指導はしたとしても描き方・技法、指導者の手法を伝授するのではなく、発想と実験を繰り返す子どもたち一人一人に伴走することで、時には適切に失敗させることも重要です。限られた授業数のなかで、試行錯誤する時間の捻出も大きな役割と言えるでしょう。



加藤 修（千葉大学 教授）

ささやかな表現を大切に

全国津々浦々、今年も様々な作品を通して、子どもたちや先生との楽しいやり取りを思い浮かべながら審査しました。その子らしさの表れた作品は、対話的な保育の中で育まれるように思います。心持ちやこだわり、息づかいを感じる軌跡に触れ、こちらも心とむ思いがしました。しかし、見込める作品志向のためか、絵の具でバックを塗って（塗らせて）仕上げる手法の多いことに疑問も感じました。幼児のささやかな線は、それに負けてしまうことがしばしば。もったいないことです。



伊藤 裕子（学校法人裕学園 谷戸幼稚園 園長）

描くことで広がる想像そして創造

考える方法は多様です。そして、描くことから始まることを、今回の審査ではあらためて実感しました。考えが自身の中で意味を持つためには、何らかの方法で表現される必要があります。表現されなかった考えは、単なる空想として消えていくのみです。まだ言語による表現が未熟な幼児子どもたちが、溢れんばかりの造形的意欲を示す理由がここにあります。描くことで、さまざまな考えは想像として広がり深まり、やがて創造となります。



大坪 圭輔（武蔵野美術大学 教授）

生きものの感のある作品

今年の審査会は寒い雨、強い雨音に包まれ、会場の体育館に並べられた作品たちは声をあげ揺れ動いているようでした。そんな中、妙に静かに思われたのが紙にプリントされたデジタル作品でした。そこには鮮やかな色彩やデザイン性はあるものの、どこか生きものの感が無いように思われたのです。この評価はこれからの課題だと思いますが、私はやはり作者の息づかいや温もりが作品には欲しいと思ったのです。



金子 光史（アート工房「フェース of ワンダー」代表）

子ども理解の機会としての表現の場

指導者の導入、環境設定によって、表現の方向性がある程度決まると思われますが、その中でも、自分のこだわりや物語性など楽しんでいる様子が多くの作品に見られました。細かい線や勢いのあるタッチ、言葉にできない混色の色合い、それらは、作品の「味」となっています。描画表現の場は、指導者が子どもの個性に出会い、理解していく場でもあったと感じました。そういう意味で子どもの自由な線や形が大切にされる表現の時間はとても貴重だと思います。



栗山 誠（関西学院大学 教授）

「すばらしい作品」を描き続けてください

どの作品も生き生きとした感性と表現力があふれた優れた作品ばかりで、審査するのに大変苦労しました。選ばれた作品は、一生懸命でいねいに描かれていて、主題、何を描きたいのかがしっかり伝わってくる作品ばかりでした。絵は、描いた人を心豊かにしてくれますが、見た人も心豊かにしてくれます。様々な気づきや感動を通して描かれた作品は、どれも人に感動を与え、見るものの心を和ませてくれます。これからも「すばらしい作品」を描き続けてください。



佐藤 利行（神奈川県川崎市立渡田中学校 校長）

描くことからはじまる表現

描くことは、人間的な表現のはじまりです。子どもがはじめて出会う驚き・喜び・悲しみなど、一人一人がいろいろな心の動きを感じ・伝えたくなり・描きたくなります。そのはじめてで新鮮な1枚の絵が、周囲の友達や大人の眼差しと出会うときの感動は大きなものです。描くことから表現ははじまります。心をつくして丁寧に、大切な1枚の絵を感じる眼差しを増やしていきたいと思います。



照沼 晃子（関東学院大学 教授）

感性と想像力を働かせて

今年も、自分の身の周りや生活の中にあるよさや美しさに目を向け、感じ取ることを大切にして表した作品に出会うことができました。人間だからこそ未来を想像し、創造することができます。子供たちには、これからも、体験したり、多くの人たちと交流したりして、美しいものや優れたものに接して感動すること、思いを膨らませたり想像の世界を楽しんだりすることを大切にして創造的に表していってほしいと思います。



小林 恭代（国立教育政策研究所 教育課程調査官）

子どもたちの“わくわく”表現！

動物や虫たちの生き生きした姿、たわなに実ったミニトマトを収穫する様子、楽器を演奏する様子、学校の玄関や廊下、通学路の何気ない風景などが描かれた絵画作品には、それぞれの子どもたちの感じている“わくわく”した気持ちが表現されていました。どれも子どものいま、そのときにしか描くことのできない貴重な作品の数々に出会い、元気をもらいました。みんな、この伸びやかさを大切に、心健やかに成長して未来へ羽ばたいてほしい！と感じました。



高橋 由香（NHKクリエイターセンター 第1制作センター〈教育・次世代〉チーフ・ディレクター）

「表したいこと」を見付ける

「どんなことを感じたり考えたりして描いたのだろう」と考えながら、それぞれの作品を見せて頂きました。今年も力いっぱい描いた子供たちの作品と出会わせて頂き感謝申し上げます。作品からは、対象や事象をじっくりと見つめて捉えた形や色彩の特徴や美しさ、身の回りの出来事や想像したことなど、表したいことを大切にしながら作品に熱心に取り組んだ姿が伝わってきました。これからも一人一人の子供が素直に自分の力を発揮していった欲しいと思います。



平田 朝一（国立教育政策研究所 教育課程調査官）

応募要項に年齢表記はないけれど

この全国教育美術展の応募要項には年中、年長の表記しかありません。当然それぞれの4～5月生まれも1～3月生まれも同時に並べて審査します。描画発達はその子どもの興味関心が明らかになるばかりでなく思考の広がりや深まりも見えてきます。どうしても成長発達が進んでいる作品を取り上げてしまい、年中児の魅力が詰まった、描きたいイメージを率直に伸びやかな線で表現している作品が少なかったことを反省しています。



平田 智久（十文字学園女子大学 名誉教授）

教育美術における「個別最適」を想いつつ

今年の審査で印象的だったことは、中学生の作品群から「この子たちの眼に映る実風景は、私が認知している映像とは世代間隔を超えた違いがある」と実感したことでした。一方で、各地域で奮闘されている指導者の熱意を反映した特色ある題材が継続的に踏襲されている状況も確認しました。私的直感の域は超えませんが、この教育美術の現状を社会的要請の「個別最適」という概念に重ね合わせる複雑さを想いつつ過日を振り返っています。



堀井 武彦（お茶の水女子大学附属小学校 教諭）

見えるものとの対話を深めよう

今回も中学生の素晴らしい作品にたくさん出会えました。一枚一枚の作品には生徒の対象物への語りかけと、しっかりと観察して描くという気持ちが感じ取れます。一枚の絵を完成させるためには、対象物を見つめて、その美しさや全体の雰囲気を感じ取る心が大切です。小学校の図画工作科の学びからつながって、中学校の美術は見ることの視覚体験を深めることや、地域の自然、風景、文化を探索する授業づくりが大切であるように感じています。



松山 明（大阪芸術大学 特任教授）

導かれた表現

魅力あふれる作品群を前に、描かれる内容が画材とその技法、支持体（画用紙等の性質や状態）によって「導かれている」ことを感じました。また、描くことは、視覚的イメージをそれら物理的材料との戯れや格闘によって変容させ、やがて思惑を超えて未知の世界に出会う営みであることをあらためて思いました。そして、そうした飛躍が画材・技法の可能性をよく知る指導者の力量と情熱によって導かれることを垣間見た思いです。



仏山 輝美（筑波大学 芸術系教授）

異なることを恐れずに

「大人には絶対描けない」「AIでもできないぞ」と感じる多くの作品に元気や勇気、感動を貰いました。子どもの豊かな創造力に心から感服します。また「他人と異なる発想」には、わくわくする気持ちを抑えられません。「どこから思いついたのだろう」「どんな風にこの表現に辿り着いたんだろう」と想像するのです。これからも自分の表したい思いを、他人と異なっても恐れず、楽しんで作品に表現し続けてほしいです。



本田 妙子（大阪府大阪市立敷津小学校 校長）

「子どもの表現」を勉強してください

全国からの「良い実践」の結果としての絵に多く出会えた一方で、暗澹たる気持ちになる絵もたくさんありました。指導者の先生方には、「コンクールにいかに入選させるか」ではなく「子どもの表現とは何か」についてもっと勉強していただきたい。低年齢だから通用する巧妙な「やらせ」。子どもが描きたいと思うはずのないモチーフ。写実的に描かせただけの、何が言いたいかわからない絵。まだこんな実践があるんだ！と驚きました。



吉田 貴富（山口大学 教授）